

2.3.3. ワークショップ・シンポジウム

コンソーシアム科目の開講とともに本事業の根幹をなす活動として共同ワークショップの開催がある。ワークショップでは、本学および協定校の教員の指導のもと、本学大学院生と協定校の大学院生がお互いの研究の発展に貢献する形で交流を深めたため、共同研究を促進する重要な役割を担った。また、共同研究を具体化するディスカッションの多くでは、教員と共に藤井友比呂、川村知子本学嘱託講師が指導を行い、若手研究者として共同研究にも参加した。



[台湾・国立清華大学とのワークショップ]

本事業最初の共同ワークショップは、台湾・国立清華大学の教員と大学院生を招聘し、2006年9月14日～15日に「移動と解釈」をテーマに開講された（プログラムは2.2を参照）。ワークショップに先んじて行われたコンソーシアム科目が終了したのち、14日午後から斎藤衛本学教授の拡大投射原理と主語の概念についての発表で幕を開け、清華大学院生 Hsin-Hsien Yu 氏の評価副詞の分布に基づいた中国語の文構造についての研究発表が続いた。第二日目は、鈴木達也本学教授の英語動名詞間接疑問文についての発表を皮切りに、清華大学院生 Barry C.-Y. Yang 氏の中国語 *wh* 名詞/*wh* 副詞と文左方周縁部に関する発表、同じく清華大学院生 Liching Livy Chiu 氏の中国語多重スルーシングに関する発表、本学大学院生・瀧田健介氏の疑問補文化詞の素性指定に関する発表が続き、最後に清華大学 W.-T. Dylan Tsai 教授の台湾現地語の時間副詞に関する発表で幕を閉じた。



Yang 氏の中国語 *wh* に関する研究、瀧田氏の日中語 *wh* に関する研究は、いずれも清華大学 W.-T. Dylan Tsai 教授の理論を基にしており、この二人を中心とした大学院生グループが、コンソーシアム科目の講義内容もふまえて、日中語 *wh* 構文の

比較を追究することになった。また、Chiu 氏の中国語スルーシングに関する発表についても、日本語のスルーシングを研究対象としている本学大学院生の須川精致氏と Chiu 氏を含む日中語比較のチームが構成された。

[インド・ハイデラバード国立言語研究所とのワークショップ]

ハイデラバード-南山共同ワークショップ（テーマ：Syntax-Semantics Interface）は、2006年10月21日～22日の日程で行われた（プログラムは2.2を参照）。斎藤衛本学教授の開会の辞に続き、ハイデラバード国立言語研究所 P. Madhavan 教授が他動性交替と動詞句の構造について、本学の青柳宏教授が OV 言語



の統語構造と情報構造の相互作用について、ハイデラバード大学院生 Vineet Chaturvedi 氏がヒンディ語の心理動詞および所有構文の関わりについて、それぞれ研究発表を行った。二日目に入り、ハイデラバード大学院生 Paroma Sanyal 氏がバングラ語の心理動詞構文について、本学大学院生・青野ますみ氏が日本語反優位性現象について、藤井友比呂本学嘱託講師が日本語心理動詞主語の制御について発表した。最後にハイデラバード国立言語研究所の K.A. Jayaseelan 教授がドラヴィダ語の心理述語と存在述語の共通点についての研究を発表し、全ての発表が終了した。



ワークショップにつづく全体ディスカッションでは、心理動詞構文に焦点を当て、主にドラヴィダ系、インドアリア系に属する諸言語と日本語の比較をし、分析を検討した。本学大学院生・瀧田健介氏、富士千里氏らを中心に複数のセッションが作られ、ハイデラバードから参加した若手研究者 M.T. Hany Babu 氏、大学院生 M. Keerthi Azad 氏も交えて活発な議論が繰り広げられた。

[イギリス・ケンブリッジ大学および台湾・国立清華大学とのワークショップ]

2006年12月2日～3日、「機能範疇と語順」をテーマとして、ケンブリッジ-清華-南山共同ワークショップが行われた（プログラムは2.2を参照）。

まず、ワークショップ前日の12月1日、協定校と本学の参加者が集り、事前の打ち合わせを行った。前半は、本学大学院生と協定校大学院生が各々の研究トピックについてインフォーマルな形で意見交換を行った。後半は、本学齋藤衛教授と大学院生・瀧田健介氏のリードによって、2006年9月に行われた国立清華大学とのコンソーシアム科目以降の共同研究の進行状況を確認し、ワークショップで議論すべき課題について打ち合わせがなされた。



翌12月2日にワークショップが始まり、まず清華大学 T.-H. Jonah Lin 教授が、多重モーダル構文と時制解釈について、本学大学院生・瀧田健介氏が名詞句内部で起きる尊敬化と N' 削除についての発表を行った後、ケンブリッジ大学からの参加者によるケルト系言語についての研究発表が続いた。Edward Wilford 氏はケルト語の動詞的名詞の統語範疇について、Glenda Newton 氏は古代アイルランド語の動詞システムの性質についてそれぞれ発表し、最後に Ian Roberts 教授がウェールズ語の VSO 語順の分析に関する諸問題について発表を行った。全体ディスカッションでは、齋藤衛本学教授を中心にケルト系言語の動詞移動と日本語の動詞移動の比較研究の可能性が検討され、ケンブリッジ大学から参



加した若手研究者 Theresa Biberauer 氏も交えて熱心な議論が展開された。

二日目は、清華大学院生 Chuan-Hui Ally Weng 氏の中国語動詞 *rang* とその補文構造についての発表で始まり、同大学院生 Chao-Lin Li 氏による台湾現地語プユマ語の文構造に関する発表が続いた。午後は、本学大学院生・伊藤敦司氏が日本語の二重目的語構文の項構造に関する分析を提案し、本学言語学センター非常勤研究員である高野祐二金城学院大学教授が内項間の語順とその派生について発表を行った。翌日も村杉恵子本学教授を中心に、清華大学グループとのディスカッションがあり、本学大学院生・渡邊恵理子氏が Lin 教授のワークショップ発表に基づいて日本語資料を準備して、詳細な日中語モデルの比較がなされた。

[イタリア・シエナ大学およびアメリカ・コネチカット大学とのワークショップ]

2007 年最初の共同ワークショップはシエナ大学、コネチカット大学と共に行われた（2007 年 2 月 20 日～21 日；プログラムは 2.2 を参照）。ワークショップの後、協定記念シンポジウムが開催されたため、ワークショップには全ての協定校から発表者があり、ポスターセッションも含めた大規模なものとなった。ワークショップ参加者数は 60 名を越えた。

第一日目は、コネチカット大学 William Snyder 教授による言語獲得における文法的保守主義を提案する発表で始まり、シエナ大学院生 Giuliano Bocci 氏によるイタリア語の対照的焦点化に関するデータから文構造の解明を目指した研究、本学大学院生・瀧田健介氏と藤井友比呂本学嘱託講師による疑問副詞の日中語対照研究、本学大学院生・加太良枝氏による非選択束縛に関する言語獲得研究、シエナ大学院生 Cristiano Chesi 氏による統語構造構築に関する計算言語学的研究、コネチカット大学院生 Natalia Rakhlin 氏による英語獲得過程で起こる量化詞拡散現象に関する研究が続けて発表された。最後にシエナ大学の Adriana Belletti 教授によって、代名詞の生起位置から文左方周縁部の構造を解明する試みが論じられた。ワークショップ二日目は、コネチカット大学院生 Sandra Wood 氏によるアメリカ手話の獲得に関する研究発表で始まり、続いて本学大学院生・矢野敬子氏が日本語の可能構文獲得に関するデータを補文構造獲得の観点から吟味した。

ポスター発表は 2 つのセッションが設けられ、20 日の昼休みと夕方（口頭発表終了後）に行われた。ハイデラバード国立言語研究所の大学院生 Mythili Menon 氏がマラヤラム語の与格構文に関する新たなデータを紹介し、同 Tasneem Firdaus Ali 氏がヒンディ語とアンギガ語の言語間差異に関わるマイクロパラメーターについて発表した。シエナ大学院生 Elisa Bennati 氏は第二言語としてのイタリア語における代名詞の獲得に関する議論を、同 Irene Utzeri 氏はイタリア語の関係節化における主語目的語非対称性の実験的研究を披露した。コネチカット大学院生 Jeff Bernath 氏は低年齢のろう者の手話獲得について、同 Jean Crawford 氏は日本語の損益構文 (benefactive) について、研究成果を発表した。ケンブリッジ大学院生 Lila



Daskalaki 氏はギリシャ語の自由関係節について、同 Marios Mavrogiorgos 氏はギリシャ語とロマンス諸語の接語化について発表し、清華大学院生 Ting-Ting Christina Hsu 氏は時制標識を持たない言語の時制について、同 Barry C.-Y. Yang 氏は阻害効果 (intervention effects) と文左方周縁部についてそれぞれ分析結果を発表した。本学大学院生もポスターセッションに参加し、渡邊恵理子氏が、富士千里氏、加太良枝氏、村杉恵子教授との共同研究として、日本語話者による英語再帰形束縛の第二言語獲得に関する発表を行い、新村正人氏がコピュラ文の日中英比較に関する研究を披露した。



大学院生の発表は、それぞれの大学の特徴を示すものであった。例えば、Bocci 氏の左方周縁部に関する発表、Wood 氏と Bernath 氏のアメリカ手話に関する発表は、Rizzi 教授と Lillo-Martin 教授の長年の研究に基づいており、ワークショップに先立って行われたコンソーシアム科目での両教授の講義と密接に関連する内容を含んでいる。矢野氏の発表は、村杉教授の講義で紹介された同教授と本学研修生・橋本知子氏の複合述語文の獲得と機能範疇の獲得中間段階に関する研究、そしてコネチカット大学 Jonathan Bobaljik、Susanne Wurmbrand 両教授の研究に触発され、可能構文の獲得を題材として理論的実証的研究を行ったものである。また、Yang 氏の発表は、Tsai 教授の 10 年以上に亘る *wh* 構文の研究と第 1 回コンソーシアム科目 (2006 年 9 月) の講義に基づいており、瀧田健介氏、藤井友比呂氏の発表も、第 1 回コンソーシアム科目 (2006 年 9 月) において提案された日中語比較研究を追究したものである。



[言語学領域 6 大学コンソーシアム協定締結記念シンポジウム]

ワークショップ終了後の 21 日午後からは、言語学領域コンソーシアム協定締結記念シンポジウムが開催され、100 名近い参加者があった（詳しいプログラムは 2.2 を参照）。斎藤衛本学教授による開会の挨拶の後、3 つの講演が続き、その後基調講演が行われた。ケンブリッジ大学の Ian Roberts 教授が非典型的な語順の線状化に関して、ハイデラバード国立言語研究所の K.A.



Jayaseelan 教授が動詞句左方周縁部に関して、清華大学の W.-T. Dylan Tsai 教授が再帰代名詞と *wh* 句に関して、それぞれ講演を行った。最後にシエナ大学 Luigi Rizzi 教授が基調講演を行い、基準的凍結 (criterial freezing) の概念からいわゆる拡大投射原理効果、空範疇原理効果を導き出す試みが論じられた。大会は、斎藤衛教授の挨拶で閉会し、その後、懇親会が行われ、盛会のうちに、コンソーシアム科目も含め六日間にわたるイベントの幕が閉じた。

[アメリカ・コネチカット大学とのワークショップ]

言語学領域第 5 回目のワークショップは、アメリカ・コネチカット大学と共同で開催された（2007 年 6 月 24 日～26 日；プログラムは 2.2 を参照）。ミニマリスト統語論をテーマとして、大学院生による研究発表がコネチカット大学から 6 件、本学から 3 件発表された。（コネチカット大学からの参加者は、夏休みに帰省中の日本人大学院生 3 名を含む。）ワークショップは、コネチカット大学院生 Ana C.P. Bastos 氏のブラジル・ポルトガル語の多重主語構文について論じた発表で始まり、続いて同田口茂樹氏が日本語関係節の統語構造に関する論文を発表し、その後本学大学院生・富士千里氏が、日本語可能構文の獲得および発達段階について、本学研修生・橋本知子氏、村杉恵子教授と吟味した共同研究を発表した。この研究は、本学大学院生・矢野敬子氏がコネチカット大学-シエナ大学-南山大学共同ワークショップ（2007 年 2 月 20 日～21 日）において発表した可能構文の獲得研究をさらに深めたものである。



午後からは、コネチカット大学院生 Natalia Fitzgibbons 氏によるロシア語否定一致項目に関する発表、本学大学院生・瀧田健介氏による統語部門と音韻部門における線形順序の位置づけについて論じた発表、コネチカット大学院生 Duk-Ho An 氏のスラブ系言語の多重 *wh* 前置の分析を提示した発表が行われた（以上第一日目）。

一日置いた 26 日には、コネチカット大学院生の澤

田剛氏が日本語の「だ」の分布の分析を紹介し、続いて、本学大学院生・渡邊恵理子氏が幼児の日本語において起こる与格主語の過剰生成について分析を提案し、最後にコネチカット大学院生である田中拓郎氏が数量子遊離現象に見られるアスペクトによる制約について論じた。

一日目、二日目とも、研究発表終了後に全員でのディスカッションが行われた。将来の共同研究に向けたトピックがいくつか提示され、本学大学院生がそれぞれのトピックについてプレゼンテーションを行った。渡邊恵理子氏は Ana Bastos 氏が発表したブラジル・ポルトガル語の多重話題構文と日本語の多重ガ格構文を比較し、その性質の違いを検討した。上田平安氏は動作名詞句内の項名詞句のスコープ関係について発表を行った。また、ブラジル・ポルトガル語の *wh-in-situ* と東アジア言語の *wh-in-situ* の類似点と差異についても検討がなされ、メール等で意見交換を継続していくことが確認された。

[インド・ハイデラバード国立言語研究所およびイギリス・ケンブリッジ大学とのワークショップ]

2007年9月19日～20日には、インターフェイス条件をテーマにケンブリッジ-ハイデラバード-南山共同ワークショップが開催された（プログラムは2.2を参照）。まず、川村知子本学嘱託講師が英語 *because* 節に関して、*when* 節との差異を基に情報構造と否定の相互作用に関する提案を行ったのに続き、ケンブリッジ大学 Ian Roberts 教授が主要部移動の理論的位置づけを検討し、Agree に基づく分析を提案した。その後ハイデラバード国立言語研究所 K.A. Jayaseelan 教授が、句構造節点に対するラベル消去の可能性を検討した。



翌日は、まず、同大学院生 Paroma Sanyal 氏がヒンディ語、バンガラ語、マラヤラム語、英語を比較し、所有者構文の格における言語間相違の分析を提示した。この研究は、ワークショップに先立って開講されたコンソーシアム科目で、Jayaseelan 教授が提案した句構造理論に関するケーススタディとして位置付けられる。続いて、Vineet Chaturvedi 氏が、ヒンディ語、英語の分詞 (*participle*)、特に受動分詞、完了分詞、分詞の形容詞用法に関するデータを取り上げ、統語範疇論における分詞の位置づけを考察した。ケンブリッジ大学院生 Edward Wilford 氏は、単語の語根 (*root*) の情報を含む独立した語彙部門を設定するという提案を行い、文法化、語彙化 (*lexicalization*)、複合語形成に関する事実に説明が与えられるという帰結を示した。その後、本学大学院生・須川精致氏が削除現象に関する研究発表を行い、日本語「スルーシング」で島の効果消失現象が起こらない環境を検討して、LF コピーに基づいた分析を提案した。この発表は、本事業とは別に、本学言語学研究センターが2006年8月に開催した削除現象に関するワークショップにおいて、本学大学院生・篠原道枝氏が発表した内容をさらに深めたものである。

最後に青柳宏本学教授を中心として、三校の大学院生のディスカッションが行われ、アフリカンス語と日本語の否定一致項目の比較研究、ヒンディ語やバンガラ語の所有文、存在文と日本語の当該構文の比較研究に関して活発な議論が行われた。後者については、本学大学院生・伊藤敦司氏を中心としたグループが、現在も共著論文の作成に向けて、継続して共同研究を行っている。



[イタリア・シエナ大学および台湾・国立清華大学とのワークショップ]

本事業言語学領域最後のワークショップは、イタリア・シエナ大学、台湾・国立清華大学から教員・大学院生を招聘して、2月2日から2月3日の二日間にわたって行われた。第一日目の2月2日は、午後から、清華大学 T.-H. Jonah Lin 教授が中国語の多様な場所句主語について、本学大学院生・瀧田健介氏が循環的線形化といわゆる適正束縛条件について、シエナ大学院生 Giuliano Bocci 氏が焦点化、話題化現象の音韻的特性についてそれぞれ発表を行ない、最後に清華大学院生 H.-C. Joyce Tsai 氏が、本学村杉恵子教授の日英語比較研究を基礎として、中日韓語関係節を比較・検討した。

第二日目は、斎藤衛本学教授の項削除に関する発表で幕を開け、その後シエナ大学院生 Simone Guesser 氏のブラジル・ポルトガル語の埋め込み空主語に関する発表、本学大学院生・伊藤敦司氏の結果構文の主題位置への移動を仮定する分析の発表が続いた。午後からのセッションでは、本学大学院生・渡邊恵理子氏による日本語母語獲得におけるデフォルト格の使用（「誤用」）についての実証的理論的研究、シエナ大学院生 Vincenzo Moscati 氏によるスコップ解釈の獲得におけるいわゆる同型性一般化 (isomorphism generalization) を巡る研究、本学大学院生・村井（中谷）友美氏による乳児の発声行動に関する前言語期の理論的分析といった言語獲得に関するプレゼンテーションが3件行なわれた。

最後の1時間は、全体ディスカッションに充てられ、斎藤衛教授のリードで、ワークショップに先立って行なわれた特別レクチャーで取り扱われた分裂文、焦点化・話題化、空目的語構文を含め、多様なトピックについて、具体的な共同研究の可能性が議論された。（上述したように Belletti 教授のビデオ講義に関して挙げられた質問は、村杉恵子本学教授と本学大学院生・瀧田氏によってまとめられEメールで Belletti 教授に送られた。翌日 Belletti 教授から届いた丁寧な回答を踏まえた特別セミナーのまとめも、同時に行なわれた。）なお、翌2月4日午前中にもディスカッションの時間が設けられ、大学院生の間で今後の共同研究に関する打ち合わせがなされた。

